

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390101743		
法人名	有限会社 敬愛		
事業所名	グループホーム心の瞳		
所在地	岡山県岡山市中区海吉1465-1		
自己評価作成日	平成30年12月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JigyosyoCd=3390101743-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館
訪問調査日	平成31年1月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

津山市を拠点に複数の事業所を運営している当法人が、岡山市に初めて設立したのがグループホーム心の瞳であり、オープンから4年目を迎えた。当法人は津山市にて16年間立ち止まる事なく日々「真」のグループホームのあり方を研鑽している。グループホーム心の瞳も同法人内事業所として高い志を持っており、当法人が追求する「真」のグループホームのあり方に少しでも近づけるよう日々奮闘している。それぞれの感性を信じ、挑戦することに臆せず、常に利用者様を第一に考えている。自分達の事業所が誇れる様になる為には柔軟でたおやかな心の考え方を職員全員が持ち合わせる事に重点を置いている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

訪問調査に当たってホームの自己評価で実践している状況を読んでもと、「グループホームの運営と支援等のあるべき姿・利用者と職員がパートナーとなる関係づくり等」がきめ細かく書かれており感動した。ホームに入って利用者の皆さんと接してみると、安心して笑顔一杯で生活している様子を見て、このホームの「心の瞳」が実現しつつあることも確認できた。津山市で16年間運営している介護施設を統括している経験者がこのホームも統括するようになり、ホーム同士の交流も行われ、理念に掲げた「3つの心」の本当の趣旨を職員全員で理解しつつケアの実践に生かせるようになってきた。設立以来4年目を迎えてこのホームの職員は利用者一人ひとりと向き合い、利用者の気持ちや悩みを見出し、その解決を進めていける実質的なケアに専念していける体制になるよう期待している。今回の外部評価結果として、各項目に関連して「心のケア」を主体に提案させて頂くことにした。

Ⅴ. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の基本理念「3つの心」を朝の申し送り後に声に出して読み上げている。加えて3つの指針と職員宣言（毎日1つずつ）を唱和している。管理者及び職員はこの事業所の理念を大切に思っている。本拠地である津山市グループホームへもオリエンテーションへ行っている。	ここは個々の「知・情・意」で生まれるが、他人との関わりを実行しようとするエネルギーを発起することで共感しようとする。しかし表面に現れるのは、表情・言葉・動作のみなので、お互いに共有するコミュニケーション能力が大切である。	利用者にパートナーとして向き合うならば、その人の気持ちや動作をどのように察知するか、どのような言葉を聞いたのかを記録しておくルールを決める必要があると思う。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のお茶のみ会やオレンジカフェ（いずれの月も1回）への参加がほぼ定着し、盆踊り大会も毎年参加している。近くの中学校や児童養護施設との交流も図っている。特に中学校とは、夏のボランティア、職場体験、体育祭、文化祭、ギャラリー鑑賞と積極的に関わりを持っている。12月には初めてギャラリーへの出展を行った。今年は地域内にある若松園の小学生と交流することが出来た。	地域の色々な行事に参加したり、子供や生徒、大人の人々の来訪がある。それらを通して利用者は過去に体験してきた事と重ね合わせて感動する人もいだろう。職員は利用者の表情や言葉を見抜いて欲しい。	人間の一人ひとりの財産は「記憶」です。色々な出逢いによって自分の記憶を思い出し感動したり、悲しんだりする。利用者の様子をしっかりと観察や話しかけて記録すると良い。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議、ホームの行事等で地域の方々に認知症について話す機会を設けている。毎年中学生の職場体験や夏休みボランティアの受け入れも行っている。オレンジカフェでは地域の防災訓練にも声を掛けただくなど理解が深まったと感じる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回運営推進会議を開催し、ホームでの生活、行事、取り組みや、地域活動の様子を報告している。毎回手作りのお菓子を用意し、意見交換を行っている。この会議から地域の情報を得られることが多い。今年から身体拘束廃止の研修会についても報告している。	運営推進会議は2ヶ月に1回開催し、しっかりした議事録が公開されている。参加者から広い見識で情報交換やホームの状況を理解してもらっている。心の事は万人に共通するテーマなので、積極的に話題にしたら良いと思う。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎年市の集団指導に参加して介護サービスの適切な運用に努めている。運営推進会議には地域包括の職員の参加があり、情報交換をしている。入居者の家族の支援を包括センターへ繋げることが出来た。	市の担当者には運営推進会議等でホームの実情をよく理解してもらっており、些細な事でも相談をしたり、情報交換等をしている。日頃から行政機関との連携はしっかりと行えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は建物内の鍵は開錠し、センサー等の設置もしていない。B棟の出入り口にインテリアに馴染む鈴を取り付けているものの（A棟はつけていない）、その音を頼りにせず、職員同士で各利用者の動きを把握し、敏感になるようにしている。夜間は施錠するが、門扉や玄関、出入り口は簡単に開くので、外に出たい欲求の強い人に注意している。今年度より適切ケアトレーニングシートを用いて、日々のケア一つ一つを振り返ることで身体拘束の芽に気付く取り組みを始めた。	身体拘束や虐待に対する認識は高く、職員間では日々防止に努めている。職員と利用者との間でパートナーとしての意識を広めていくことが最大の防止につながるだろう。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員同士でお互いの言動に注意し、少しでも虐待に繋がるような言動が感じられたら、上司に報告している。適切ケアシートにより日々のケアを振り返り、虐待に繋がるケアを初期から予防している。接遇向上についてもワッペンをエプロンに縫い付けて意識している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	まだ出来ていないが、いずれは勉強会を開催したいと考えている。他部署の研修報告を共有し成年後見人などについて学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	実施している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には利用者や家族が1名ずつ出席し、意見を聴取している。10月の体育の日には運動会と家族会を同時に開催し、アンケートに記入していただいた。面会に来る家族も多く、その都度話を伺うようにしている。	家族には、毎月手紙で生活の様子や状況報告をしたり、面会時や電話等で意見や要望を聞いている。また、家族と事業所とは信頼関係を保ち、アンケートの結果もそれを物語っている。	パートナーという間柄で利用者に接して、心の交流をしていくことは家族にとっても有難い事だと思うし、家族・利用者・職員の間に広げてコミュニケーションをしていて欲しい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の全体ミーティングとフロアミーティングで忌憚のない意見が出され、普段からも意見や提案を出しやすい雰囲気を作っている。全体ノートやフロアの申し送りノートで職員間の情報を共有している。また職員は「防災」「感染」「生活自立」「マニュアル」のいずれかの委員会に属しており、委員会を通じて業務改善に努めている。全体ミーティングには毎回津山より統括が参加し、法人全体の業務を束ねている。	職員の行動を見ていると、まだ介護の仕事をしているという実感である。残念ながら「3つの心」を目指しているホームを考えると、職員の言動、行動から、又記録や介護計画等書面からも一層の変化が必要と思う。	利用者の心を動かすきっかけは、個々の長期記憶を想起させることから始まる。そのためには職員は利用者の過ごしてきた過去のエピソードを知っていなければ「話せて良かった」と感動する感情を生み出してあげて欲しい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は津山市から岡山市へ移住し就業環境の整備を行う事に専念している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理職は月に1回程度津山に赴き教育部長から管理職としての心得を指導されている。各職員もそれぞれの経験やレベルに応じた外部研修に参加し、全体ミーティングでの研修報告や伝達研修という形で他の職員に対しても学んだ知識を伝えている。年間を通して三好春樹先生の講座へ参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	実践者研修への参加により、同業者と語らう機会があり、他の事業所の取り組みを伺うことができた。こうした研修の場を通じて同業者との交流を図っていきたい。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	これまでの生活環境に少しでも近づける様日々困っている事不安に思っている事を聞き、安心して頂ける様努めている。新しい入居者には「ご縁を大切に」と書いたカードと5円玉を贈っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にも家族の思いをしっかりと聞き取れる様、日々何かあれば連絡を取りながら信頼して頂ける様関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族がその時必要としている支援が見極められる様に頑張っている。初期には、まず基本の3大介護をしっかりと探り、本人の体調や環境への適応に重点を置いており、カンファレンスや手紙等、様々なツールで意向を把握している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来る事はして頂き、出来ない所をサポートして出来る様に支援する様に心がける事が当事業所のあり方である。さりげない声かけに努め、無理強いにならないようにしている。そして、共に過ごし合う関係として、「居室担当制」から「パートナー制」へと名称を変更した。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の絆を大切に出来訪時の時間はゆっくり出来る様配慮し、来訪出来ない時も状態が分かる様毎月手紙と写真を送っている。暑中見舞いと年賀状は本人が作成したものを発送している。2か月に1度手作りの新聞を発送し、ホームでの暮らしの様子も伝えている。面会時には毎月のアルバムを見ながら会話するようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や親族が面会に来られた際にはゆっくりと話が出来る様配慮している。近所のスーパーや産直市場に買物に行った際には「ここにはよく来ていた」「前より広くなったね」といった声が聞かれる。	日頃から頻繁に面会に来てくれる家族もあり、気軽に訪問しやすい環境作りをして馴染みの関係継続を支援しており、利用者の馴染み人や場所への対応はしっかり行っている。	この場面も利用者の以前の記憶を思い出すきっかけである。単に良かったで済ませるのではなく、その時のエピソードを記録に残し、職員全体で共有して何度でも話題にして欲しい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	隣席の利用者同士がお喋りを楽しんだり、お互いを労わっている様子がよく見られる。席も固定せず、いろいろな利用者と交流できるようにしている。年に3回両棟合同行事があり(花見、そうめん流し、餅つき)、演奏会等も両棟合同で楽しんでいる。関わりが難しい利用者には職員が間に入り孤立しない様にし、入居者同士のもめごとにも早く気づき対応する様努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も家族からの相談があれば、相談や支援をしていこうと思っている。思い出のアルバムを贈ったり、ホームでの行事にお誘いしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向を把握に努め、気になることがあればすぐに職員同士で話をするようにしている。特にプラン見直しの時はしっかりと意見を出し合っている。	利用者のホームでの暮らしに対する意向を聴取する時の状況を想像すると、単に質問をしている程度と思う。利用者としてしっかりコミュニケーションした中から適切な言葉を造り出すべきではないかと考える。	人間にとって「希望・意向・意志」は大切な要素である。それらを総合すれば意識となり、記憶によって「心」を形成する。認知症になって自力で出来ない部分をもっと具体的な意向となるように補ってあげて欲しい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの聞き取り、入居前のケアマネジャー、看護添書等から情報を得て、職員全体で共有して行く様に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタル測定、その日の行動、顔の表情等、日々現状の把握に努めている。様子がおかしい時には訪看・医師に連絡し指示をもらっている。できるようになったこと、できなくなったことについて職員同士で情報交換している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族・必要な関係者と話し合い、意見を聞き、介護計画を作成するようにしている。今年は入居者ががらりと入れ替わり、皆で一人一人の情報を速やかに共有し、共に悩み、喜び、支援計画へと繋げている。	国の介護計画や一連の書式の作り方は理解しているが、「真の心のケア」を考えるならば、利用者の真の意向による生活をする上での問題点を把握して、その課題(ニーズ)を解決するための計画を推進することが必要と思う。	意向によってどんな楽しい生活ができるか、それを実行するために阻害要因がある筈だと思う。その問題解決をしてあげるのが介護計画と考えたらどうでしょう。重要な課題から1つ又は2つ位の解決するテーマに絞って実施して下さい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は健康チェックシート・経過記録でまとめて見ることが出来る様にしている。日々の気づき等も申し送りノート等を利用し職員全員で共有し実践や介護計画の見直しに活かせるよう努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況が変わればニーズも変わってくる。その時々ニーズに沿った支援方法を家族と相談しながら考えるようにしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物はできるだけ地域のスーパーや産直市場を利用している。コープの注文購入もしているが、利用者がチラシを見ながら欲しいものを注文することもある。不定期ながら「パンの日」と称して移動パン屋の訪問もある。また公共図書館から本やDVD,CDを借りて利用者に楽しんでもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	1ヶ月に2度の主治医の往診がある。他科の受診が必要な場合には家族や職員が同行している。訪問歯科も利用している。	医療と介護の連携が出来ているので本人・家族共に心強く、医師や看護師の支援を受けて、利用者は楽しく安心な生活ができています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1度、訪問看護師が来ている。様子、状態を伝え情報を共有した上でアドバイスをもらい、看護師の指示により医師へ繋げるようにしている。特変時電話連絡をし必要に応じ来て頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院の際には病院に情報提供を行う。入院中は面会に行き本人の状態を確認すると共に医師、看護師、相談員と共に早期退院に向けて話し合いをしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	昨年に引き続き、各棟で一人の人生の最期を看取ることとなった。昨年の春に、「2週間後の誕生日まで難しい」と医師の診断もあったものの、徐々にお元気になる、年を越すことができた。長い支援の為、2度目の看取り契約を結んだ。	昨年、初めて看取りになったと思われた利用者の中で、一人元気になり、流動食から刻み食にまで回復した人がいた。職員にとっても終末期ケアの貴重な介護経験となった。精精神科に特化した訪問看護と連携できたのも良かった。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアルを作成している。感染対策についても委員会メンバーによるマニュアルの見直しが適宜行われている。昨年、今年とインフルエンザが発生し、感染対策をあらためた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年5月には火災避難訓練を実施した。3月には連絡網を使った通報訓練を実施した。昨年は7月に大災害があり、その際には2階へ避難し18名で2晩過ごした。関係各所へスムーズに連絡が取れ、職員も勤務に関係なく出勤し、チームワークには大変助けられた。	昨年7月の大災害で、非常食の備蓄が少ない事が分かり、災害に備える対策を考えるきっかけとなり、訓練と実践の違いが分かった。2階に合同で過ごした際、床に敷いたマットで転倒骨折した入居者が1名出た。日頃からの訓練の大切さを改めて実感し、近所の施設と協働して災害時助け合う事も話し合った。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとり人格が違うので、その方に合った対応を心がけている。呼称制度を設け、本人や家族に確認し、一番呼ばれたい呼び方で呼ぶようにしている。一部の入居者ではあるが、家族から昔の写真をお借りしており、その人の人生そのものへの関わりを深めていきたいと考えている。	排泄・入浴時等の自尊心や羞恥心には特に配慮している。また、一人ひとりの尊重とプライバシーの保護は、心のケアの一環だと思う。ホームの理念を生かして行動してもらいたい。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	こちらからの押し付けにならず、本人の思いや希望を表し、自己決定出来るよう対応している。ドリンクタイムではメニュー表から飲みたい物を選んでもらうこともある。特に本人の誕生日を最も大切なものと位置づけ、本人のお好きなものを召し上がっていただくようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりに合ったペースは大事にしている。その時々によっても違うのでその時の様子、表情には気を付けて支援している。チームとしてのケアは、24時間で見る事を大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服の修理、ボタン付け等出来る方には自分でしてもらっている。その日に着たい洋服も選んで頂いている。行事によっては化粧やネイルをしたり、アクセサリーを身に着けたり、雰囲気盛り上げるようにしている。散髪は2ヶ月に1度利用している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節感(夏は流しそうめん、冬は鍋)や手作りにこだわり、ほぼ毎日利用者が調理や配膳に関わっている。利用者と一緒に料理本を見ながらメニュー会議を行ったり、利用者同行で買物もしている。、ホームに帰ってから食材を陳列し、旬の野菜、形や珍しい種類の野菜を見て買物に行けなかった利用者も楽しめるようにしている。お菓子作りやパン作りも行っている。出前も楽しみにしている。	利用者の一番の楽しみはどこのホームでも皆一緒に食事することである。唯一回の食事風景を見るだけで申し訳ないが、利用者の中に席を譲り合って職員も混じって、色々とお話しながら食事が出来ると、尚一層楽しい時間が過ごせるのではと思った。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	塩分制限や糖尿病のある方、体重増加に注意している方等に配慮した食事を提供している。水分量もあまり飲まれない方には回数を増やしたり、甘い水分に変えたりなどして対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声かけを行い、手伝いを必要とされる方は手伝っている。居室の洗面を使用する方もおられる。昨年は、11/8にいい歯の日として「2080」について皆で学び、歯ブラシをラッピングしてからプレゼントをする等、歯磨きへの意識を高めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄のパターンを把握し対応をしている。その人に合ったパットやパンツの種類を検討し、日中と夜間で異なる対応をしている人もいる。排泄に関してはほぼ自立している方への関与についてはプライバシーを尊重するように気を付けている。	日中は布パンツにパットで過ごす人も多く、一人ひとりの排泄状況を把握して、適宜声かけをしてトイレ誘導しながら自立を目指している。排泄介助時にはプライバシーの尊厳を大切にしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分が摂れていない方にはこまめに声かけ好みの飲み物等を提供するなどして工夫している。運動不足の方には廊下等歩いて頂いたりお腹マッサージをする様に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日を月・水・金と入浴日としている。断る方は清拭・足浴で対応し、声かけやタイミングを工夫しながら、出来るだけ入浴して頂けるよう努力している。入浴を楽しんでもらうために入浴剤の使用したり、花風呂、しょうぶ湯、ゆず湯等のイベントも行っている。11/26に「いい風呂の日」として、入浴剤を楽しみ、入浴後には桶に入ったジュースを、お好きな1本を選んでいただき、飲んでいただいた。甘酒が人気だった。	入浴中に湯舟の中で職員とコミュニケーションするのが一番良いと聞いている。色々な話が弾み、その人の心の内が見えるそう。心の交流の中から意向も生まれるそう。記録もしっかり残しておきたい。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夕食後は自分のお好きな時間に帰って休んでもらっている。日中も休みたい方には居室で休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報は変わったらすぐにわかるように記録し職員全員が共有できるようにしている。与薬もれには注意しているが、落薬が多く、基本マニュアルを再徹底している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴・家族の話などから好きな事を把握し少しでも楽しんで頂ける様支援をしている。職員は日々の生活の中で利用者の能力に見合った活動を提案し、誰もが役割を持てるようにしている。例えば書道が得意だった方には行事の予定や歌詞等を書いてもらっている。余暇の楽しみとしてテレビ体操や塗り絵等を楽しんでいる。昨年は初めて、塗り絵を富山中学校の「富中ギャラリ」へ展示してもらった。社会人時代を思い出してもらう為に屋台のラーメンを外で味わってもらい、皆さん大変喜ばれた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望に添えないこともあるが散歩、買い物など好きな方には行ってもらっている。各棟での月1回の外出が定着しており、2台の車で乗り合わせ、外食や季節の花を楽しんでいる。昨年は木下大サーカスへ参加することができ、とても暑中だったのが、楽しんで事故もなく帰ってくる事が出来た。	行楽の季節には花見や紅葉狩り等自然の景色を鑑賞し、天気の良い日には庭で日光浴や外気浴を楽しんでいる。外出や散歩、特に利用者と職員が一对一でじっくり話すチャンス、そんな時に出た会話から意向を抽出できそう。記録に残しておく。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の同意を得て、いつも持ち歩く鞆の中に僅かな金銭を所持する入居者がいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話が可能なところであれば、いつでも出来る様に対応している。字を書くことが好きな方は自分から「〇〇へ手紙を書きます。」と言われ、今の気分や日々心配していること等、情緒豊かな内容の手紙を書かれている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じて絵やぬいぐるみを掛け替え、懐メロだけではなく職員が選んだ最新のポピュラー音楽やヒーリング音楽を流し、アロマディフューザーも設置している。五感を通じて、居心地の良い空間作りを心掛けている。天気の良い日は庭やベランダでお茶や食事を楽しんでいる。浴室やトイレの床は和風のしつらえを施している。	ユニットは1・2階にあり、リビングルームには大きな9人分の食卓と窓辺にソファやテーブルが置かれていて、塗り絵等の余暇活動を楽しむ人もいれば、おしゃべりが弾んで笑い声も聞こえてくる。人それぞれにお気に入りの場所を作って寛げる環境になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間のテーブルにつく時には気の合う人、合わない人を見極め本人の意見も聞きながら対応している。ソファに座るのが好きな人もいれば、テーブル席で隣席の人とおしゃべりに興じる人もいる。西側に設置しているソファも憩いの場となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具を持ってきてくださるよう入居時にはお話をする。壁紙は各居室で異なる仕様となっており、入居者の目を楽しませている。	居室は利用者の家であり、利用者が一番安心する場所と思う。ちょっとお邪魔した時、短時間でもゆっくり落ち着いて話が出来るところでもある。コミュニケーションを取りながら心の中を探ってみるチャンスかもしれない。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全には配慮している。トイレには新たに手すりを設置し、浴室などもわかりやすくしている。できるだけ自立した生活が送れるように工夫している。当ホームは2階建ての為、階段の昇り降りがあるが、普段手引き歩行の方が、一人で階段を使用することが「ひやりはっと」として上がることもある。それは安全な環境ではないかもしれないが、自立した生活としては大切な事だと思っている。「危ない」「安全第一」を大切にしつつも日常的に階段は使用していきたい。		